

幼い難民に未来を



飛び立て、カオイダンキャンプの子どもたち！

目次

特集 カオイダンで蒔いた種はこれから……

タイ・カオイダンキャンプの動きとCYRの活動 —3

子どもこそ希望の星 — 6

タイ農村ではもう根づいてきた — 9

タイの仲間日本縦断 — 10

芽が出てきたカンボジアの種 — 13

別れゆくカンボジアの友へ — 18

高校生にとっての「難民」 — 20

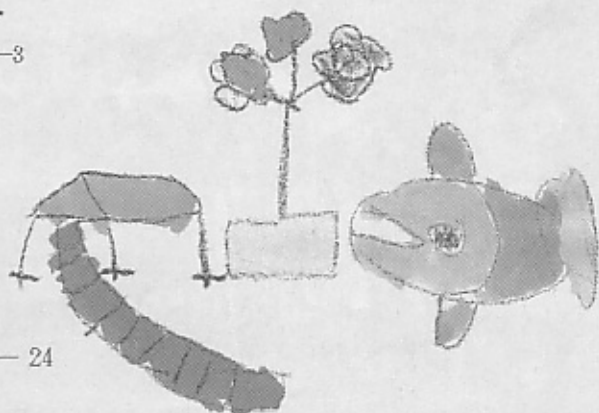
会員登場 — 22

友だちができた!! 楽しかった長野ホームステイ — 24

ボランティア活躍中! — 26

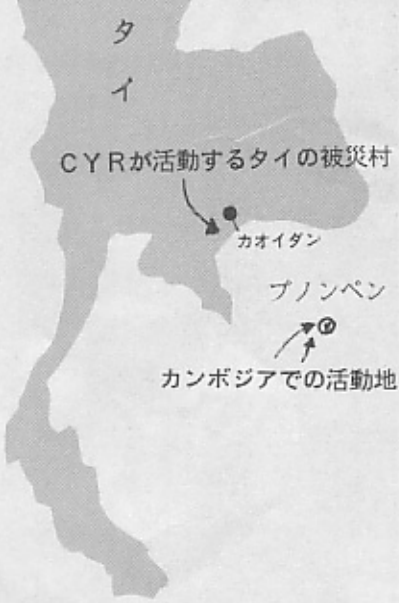
初めての挑戦! 小学生向け展示 — 28

僧侶が歩けば その4 — 30

カオイダンの子どもの絵。
(ホン・ヘン 5歳)

特集

カオイダンで蒔いた種は これから……



幼い難民を考える会は、12年前、タイにあるカオイダンキャンプで、幼い難民の健全な成長を願って活動を始めました。それは小さな民間団体が蒔いた種でした。そして、一粒の種は、カンボジア難民の子どもへの思いとして育てていったのです。

その後、別の種はカンボジア紛争の犠牲となった、タイの被災村にも蒔かれました。また、再建の波にもまれるカンボジアの貧しい村にも育とうとしています。私たちの願いをこめて、

2



勢ぞろいした、最後の「希望の家」の子どもたちと保育者、技術訓練教室のスタッフ。この人たちの心の中に蒔いた種が、カンボジアに帰ってから根づくことを祈りたい。

タイ カオイダン キャンプの動きとCYRの活動力

ベトナム軍の侵攻によりカンボジア難民がタイ国境へ数十万人も流出。国境地帯に無数の難民避難地ができる。

タイ政府とUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の協力でカオイダンキャンプ開設される。



1980年のカオイダンキャンプ。竹とニッパヤシでできた家々が軒を並べる。ピーク時には人口14万にまで膨れ上がった。

保育を始める前に、まずカンボジア人の保育者を養成した。

1979年 ● 1月

11月 現代表いいざりゆきがタイの難民キャンプを視察。帰国後、キャンプの実態を訴え、支援を呼びかける。

1980年 ● 2月

東京で幼い難民を考える会（CYR）設立される。

4月 カオイダンキャンプで第1期保育者養成始まる。

4月 12種類のカンボジア語の絵本、童話などを製作。

6月 他団体の建物を借り 100人の子どもの保育を始める。

12月 念願の保育センター「希望の家」21区に完成。

1981年 ● 1月

洋裁教室始める。

3月 織物教室始める。

4月 2つ目の保育センター「希望の家」23区につくる。

6月 手芸教室（刺繍、編み物等）開始。

10月 「育児と健康」タイで出版。（カンボジア語）

11月 「保育の手引き」出版。（カンボジア語）

11月 カンボジアの童話、絵本11冊を復刻。

1982年 ● 6月

カンボジアの伝統的絣り織りの上級織物コース始まる。

1983年 ● 2月

洋裁教室3か月のコースになる。

1984年 ● 10月

家庭や移動先で使える教材セットの製作を始める。

1985年 ● 2月

国境の避難地へ教材配布の協力始める。



保育センター「希望の家」は、保育園の回りに大人の技術訓練の教室を配置した1つのコミュニティだ。



家庭での保育を親向けに解説した『育児と健康』（右）、難民キャンプでの活動を中心に、幼児期に必要な生活体験のあり方などをまとめた『保育の手引き』（左）を相次いで出版。

タイ政府、カオイダンキャンプを閉鎖宣言。民間団体の活動は規模を縮小して継続することが認められる。



1987年頃のカオイダンキャンプ。人口約22,000人。第三国への定住率低下の一途。

カオイダンキャンプが「カンボジア帰還者のための技術訓練センター」と名称変更。



カンボジアでの生活を知らない、キャンプ生まれの子どもたちに祖国の文化を伝える布絵を製作。

1986年 ● 6月 カンボジアの文化を伝える布絵を作成。

1987年 ● 1月



3月 小学生が参加できる活動を開始。

5月 ◆東京事務所で訪問ボランティアの定期会合始める。

7月 帰還に備え、母親が保健衛生、栄養、育児の知識を持てるよう、母親教室を開く。

7月 ◆東京：カンボジア語による電話相談始める。

10月 キャンプの人口減少で23区の保育センター「希望の家」を閉じる。洋裁教室は中央部の15区に移動。

1988年 ● 5月 ★タイの村：アランヤプラテート地域の被災村の生活環境、保育施設の状態について調査開始。

9月 ◆東京：日本に住むインドシナの人向けの生活情報紙「こんにちはCYRです」創刊。

1989年 ● 4月 カオイダンキャンプ15区に新しい保育園を開く。

12月 伝統的な遊びを主に紹介した「カンボジアの遊びのカード」作成。



1990年 ● 1月

2月 ◆東京：ベトナム語による相談窓口開設。

1990年 ● 5月 絣織りの基本的な技術とパターンをまとめた『カンボジアの絣織り』を出版。



日本語、特に漢字が読めないために情報不足になっているインドシナの人たちに生活情報紙を発行。



キャンプの人口が減り、住宅が中央に移動したのに伴い、CYRでも新しい保育園を中央部に開く。



1990年頃のカオイダンキャンプ。かつては闇市と呼ばれ、タイ軍に隠れて商売していたが、取り締まりもゆるくなり、お金さえあればたいの物が手に入るようになった。

- 1990年 ● 8月 ★タイの被災村のうち、パライ、ノンヤブロンノンプロンの2つの村で保育施設への協力を開始。
- 9月 ☆第1回カンボジア調査。カオイダンでの活動をカンボジアの現状に合わせ、また国内での活動の可能性をさぐるため。
- 11月 ☆第2回カンボジア調査。
- 11月 カンボジアでの調査の結果、まだ養蚕技術が普及していないことがわかり、まず桑を5000本植える。
- 1991年 ● 1月 洋裁教室に上級者コース設ける。
- 4月 木工教室でバナナの幹の皮を使った手工芸品製作プログラムを始める。
- 5月 ☆カンボジア国内の幼児施設を訪問。関係団体、機関との情報交換行なう。
- 8月 養蚕プログラム第2段階に入り、蚕を飼い始める。「応急手当ての布絵」を製作。5枚1組。
- 10月 ☆カンボジア、プノンペンにCYRの事務所を開く。
- 12月 ☆カンボジア政府と活動の契約を結ぶ。
- 1992年 ● 3月
- 4月
- 6月 『養蚕ハンドブック』を作製。帰還者にわたす。
- 7月 織物、洋裁の技術訓練の教室を閉じる。
- 8月 木工の技術訓練の教室、15区の保育園閉じる。
- 11月 「希望の家」閉園式行なう。
- 12月

カンボジア和平協定調印。

カンボジア難民の帰還開始。

カオイダンキャンプから初めての帰還バス出発。

給水、配給、医療活動を除き、カオイダンキャンプでの民間団体の活動は終わる。



カオイダンキャンプに近いタイの被災村で保育所への協力を始める。

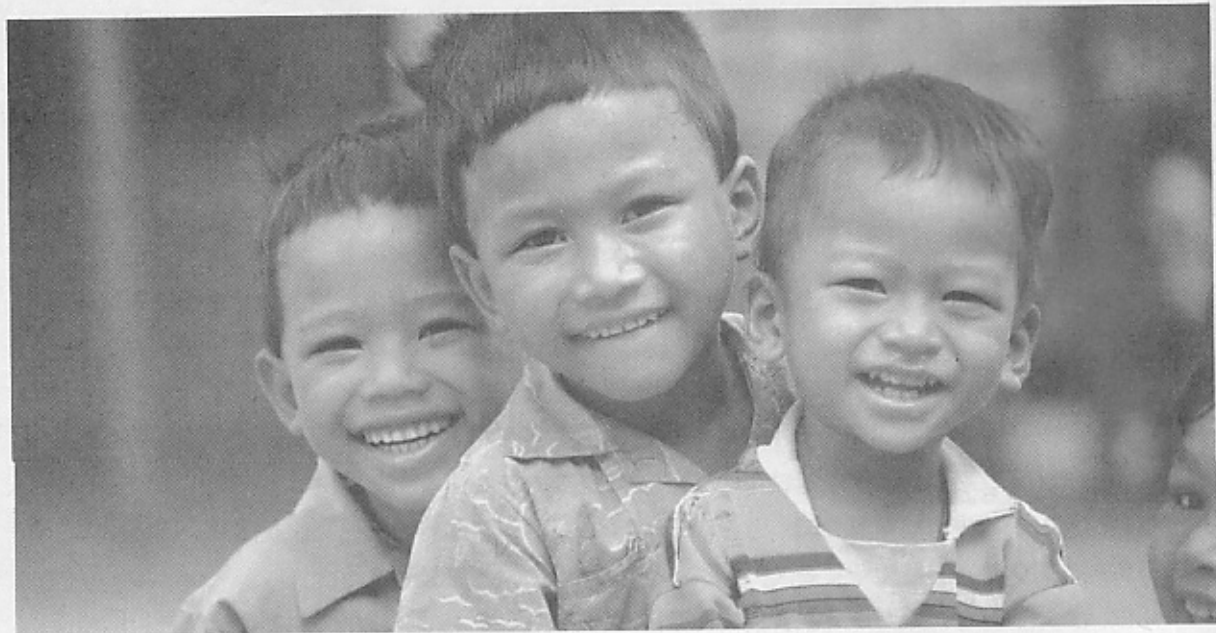


カンボジア国内であまり普及していない養蚕の技術を学ぶため、桑を植え、蚕を飼った。絹糸をとることに成功。



カンボジア政府と活動の契約を結び本格的にカンボジアでの活動を開始。

カオイダンで蒔いた種はこれから……



子どもこそ希望の星

6

—— カオイダン12年間の活動のアンカーとして

高田美江子

今年の3月末から始まったカンボジア難民の帰還により、1980年には約14万人いたといわれるカオイダンキャンプの住民は9月現在、約8,000人になりました。どんどん家が空き家になり、子どもたちがいなくなっていきます。みんな力強く帰って行くのですから、このキャンプに長年かかわってきた私たちとしてはうれしいはずなのに、どこか淋しさを感じてしまうのです。それは、みんなが帰還後の生活を不安に思っていて、それが私たちにも伝わってくるから

なのかもしれません。

子どもは希望

そんな大人の様子とちがって、子どもたちはいつもいつも元気です。子どもたちはキャンプで生まれ育って、外の世界を全く知らないの、バスに乗って外に行かれるのがうれしくて、遠足か家族旅行に出かけるみたいにはしゃいでいます。キャンプの中の、集合地に入るときも、にこにこして晴れがましい表情を浮かべています。キャンプにまだ残っている友だちに「僕は

先に帰るんだよ」とうれしそうに言っています。大人の心配や不安など関係なしに、子どもはどんどん先に行き、大人はそんな子どもたちに引っ張られるようにして行く、そんなふうに思っています。私たちにとっても別れは辛いことですが、子どもの笑顔に励まされています。やっぱり子どもは希望だと思います。

自立とは何かを問い直す

CYRはその希望である子どもたちの健全な成長を目的に活動を始めました。1980年に開設

した、保育センター「希望の家」から12年の間に約 8,000人の子どもたちが旅立っていきました。

子どもたちの成長にとって、周囲の大人の環境を整えることも大切です。織物、木工、洋裁の技術訓練の教室も開きました。自立を側面から支える活動、協力をずっとめざしてきましたが、これは言葉で言うのは簡単ですが、実際には本当にむずかしく、試行錯誤を繰り返してきたと思います。今年度は、カンボジアが大きく和平に向かって動く中で、もう一度、自立とは何かを問いなおすきっかけになりました。保育センターでも、カンボジアスタッフが、計画、活動の実施、反省、そして次の計画まで、自分たちで考え、

自分たちでやっていける力をつけてほしいと思って話し合いの機会を多くつくりました。ところが、経過報告しかなくて、何も意見が出ないし、何も問題点が出てきません。その原因は、10年以上も、閉ざされた難民キャンプにいて、自分で物を考えるという経験が乏しくなっているからだと思います。受け身の立場にずっと置かれ、保護を受けている立場だから、自分の意見を言うてはいけないというような空気がキャンプの中にあるのです。

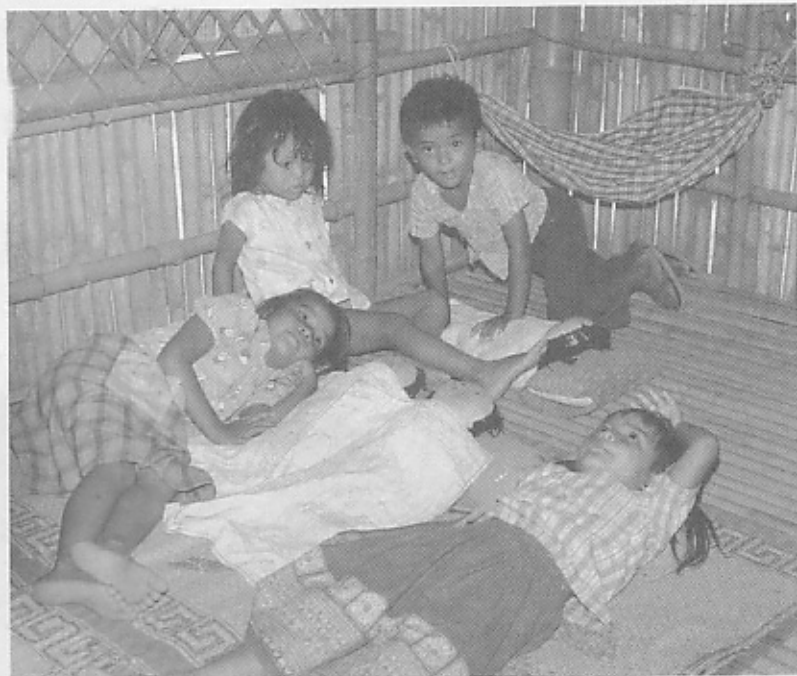
共通の思いにたどりつく

それが、4月にカオイダンキャンプからも帰還が始まると、カンボジアのスタッフの様子が

がらりと変わりました。「帰還のときにCYRは何をしてくれるの？ 資金援助はしてくれるの？」クメールの微笑から、顔つきがまるで変わって、こわい顔で攻撃してくるのです。初めて赤裸々な姿を見た思いがしました。1、2か月、毎日けんかをするようにともかく話し合いました。カンボジアのスタッフの思い通りの結果は出ませんが、対等に、自分の意見を言い合えたという共通の思いを持つことができました。そして、スタッフの顔付きが、また穏やかになっていったのが本当にうれしいことでした。

CYRのしてきたこと

感心したのは、カンボジア人



カンボジアに帰ってから、この子たちはどんなお父さん、お母さんになるのか楽しみだ。



子どもは高いところが大好き。キャンプの外もよく見える。

カオイダンで蒔いた種は
これから……



きみの目に未来はどんなふう映っているのだろう。

スタッフが、こういうたいへんなときでも、文句を言いながらも休まず働きにきたことです。保育センターには自分がやる仕事がある、待っていてくれる子どもたちがいる——これはお金ではないんです。

- 8 8月いっぱい、CYRの技術訓練の教室を閉じるので、28日にお別れの昼食会を開きました。その日の朝、もうだれも働いていないはずの織物小屋から機を織る音が聞こえました。吸い寄せられるように行ってみると、6年間CYRで働き続けた、とても働き者のおばさんが一人

<5時半>

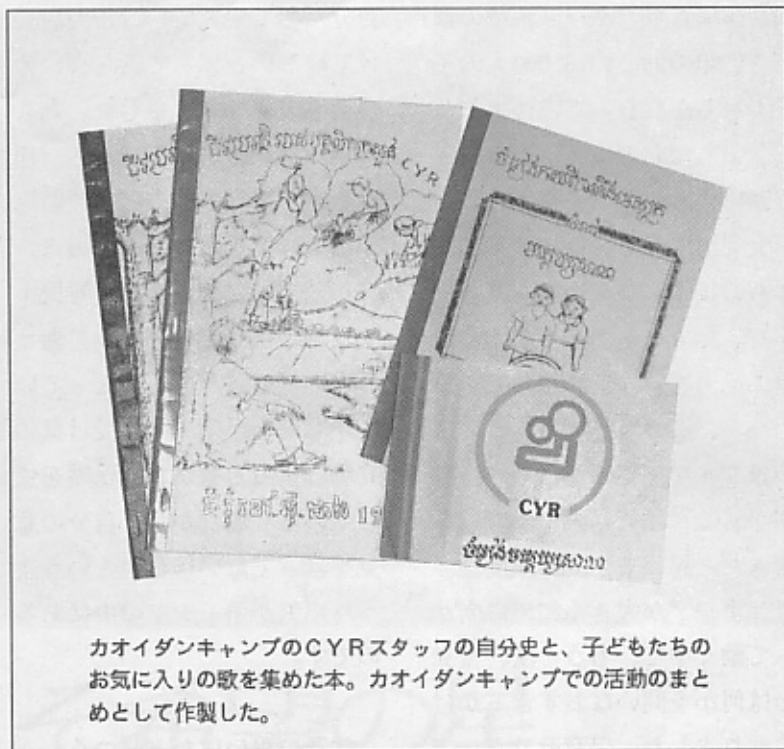
5時半 早く起きて
体操して顔を洗って 復習をする
昨夜覚えておいたことを
えらいね

6時半 急いで服を着て
ご飯を食べて 学校へ行く
父さん母さん行ってきます
きつと言うよ

よく勉強してきなさいって

——カオイダンの歌の本より——

(訳/上田広美)



カオイダンキャンプのCYRスタッフの自分史と、子どもたちのお気に入りの歌を集めた本。カオイダンキャンプでの活動のまとめとして作製した。

で織っているのです。その後ろ姿は、「私はお金のために働いているんじゃない。織物がすきで、働くのがすきだから続けているんだよ」と無言で訴えているような気がしました。私は、確実にCYRのやってきたことが根づいている、と思うと感謝の念でいっぱいになりました。

新たな旅立ち

保育園だけは、11月27日の閉園式まで運営する予定ですが、カンボジアのスタッフもいなくなり（8月で、NGOで働いていたカンボジア人は原則として退職）、3名のタイ人と私の4人で、子どもたち50~60人を保育しています。子どもたちは、めっきり減りましたが、慣れな

い私たちにとりとてもなつき、毎日笑顔で来てくれるので、こちらが本当に励まされます。時折、元の保育者が訪ねてきて手伝ってくれます。そして「CYRで学んできたことを、いつか国内で生かせる日が来たらいいな」と言ってくれるんです。

私たちがカオイダンキャンプで12年間やってきたことは、決してここで途切れたのではなく、カンボジア国内、そしてタイ国内での活動に現在も生かされていますし、これからもずっと引き継がれていくことと思います。

子どもが飛び立っていく様子に学びながら、CYRも、これから新たに旅立っていきたいと思っています。

(10月2日の報告会より)

もう

タイ農村では **根づいて** きた

そ

もそのきっかけは

CYRがタイの被災村で活動を始めるようになったのは、タイ政府が「カンボジア難民と同じ立場にあるタイの人々にも援助を」と国際社会に訴え、CYRもその意義に共感したからです。「難民と同じ立場」にあったタイ人は、タイ・カンボジア国境沿いに住んでいるため、カンボジア内戦による戦闘や被爆、放火などで被害を受けた村人です。この人々が新たに住んだ村、あるいは被害を受けた村は、被災村と呼ばれています。

い

つから

CYRの調査は1988年5月から3か月。実際の活動を始めたのは1990年8月です。初めの1年間(91年7月まで)は準備期間として、地域共同体に入って活動するのにふさわしい方法を模索。村人と信頼関係をつくることにつとめました。

ど

んなことを

村の評議会(村長、理事などで構成)が運営する保育所で、①保育者トレーニング②教材作

ど

こで



製③備品(机、いす等)、おやつ作り④菜園づくりをしています。子どもの成長を大人たちが支えるための環境づくりです。

1991年8月からは、村の住民、保育者が加わり活動計画を立てたので、多くの住民がCYRの活動に参加できるようになりました。今では、菜園づくりなど村人が主体になっています。

だ

れが中心になって

1990年5月にCYRの職員となった、農村開発の経験者プット・プットラットが中心です。現在は、無農薬菜園の担当はをプーンサワット・ソムブンボン(レック)、保育は高田美江子が補佐、全体の責任はバンコク事務所のシビカ・プラコブサンティスク(ゴイ)が受け持っています。

カオイダンで蒔いた種は
これから……

仕事の手があいているとき、村人たちが、保育所裏の菜園を耕しに来てくれる。



タイの仲間 日本

縦断



総会の準備に

2か月。タイで
リハーサルまで
してきました。

ゴイ

ピアップ

会員から、タイの
活動についての
質問がなくて
がっかり。

ブット

総会の資料が
英語で書いてあれば
C Y R 全体の活動が
よくわかったのに。

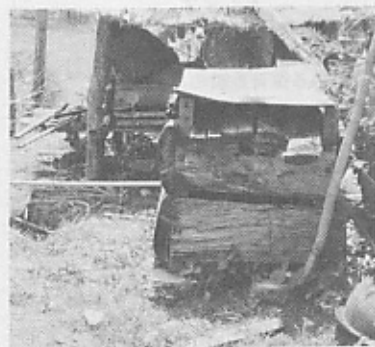
タイの村担当のブット、ゴイ、そしてカオイ
ダンキャンプの活動を担当しているピアップの
3人が、6月に総会出席と研修を兼ね来日しま
した。ブット、ピアップには初めての日本です。



◀子どもが健康に育つためには、
栄養を考えた食事やおやつ、遊
び、学習などのさまざまな体験
が必要なことを、村人たちに理
解してもらうため、住民といっ
しょに作業をします。

総会での報告

10



◀91年 8月パライ村に井戸完成。

C Y R が協力して解決した最
初の問題は「水不足」でした。
井戸掘りに必要な資金を援助し、
村人がつくりました。村では農
業用に、保育所では子どもの水
浴び、皿洗い、菜園の水撒きに
利用しています。



92年 1月11日子どもの日の催し。▶
パライでは、村長が村人に放送
で知らせ、村に駐屯している兵
士がトラックで荷物運びをして
くれました。園児、小学生、大
人合わせて 200人近くが集まり、
大盛況。ゲーム、絵描き、歌、
踊りなどを楽しみました。



▲給食用菜園を作る

保護者の払う保育料（子ども 1
人につき月30パーツ、払えない
親も多い）で、評議会は食糧、
資材を購入していますが、十分
ではありません。そのため、7
月から保育所の裏に菜園を作っ
ています。いろいろな野菜を植
え、9月くらいから給食に使い
始めました。天然の防虫剤（香
りの強い植物を醗酵させてつく
る）を使った安全な野菜です。

●問題点

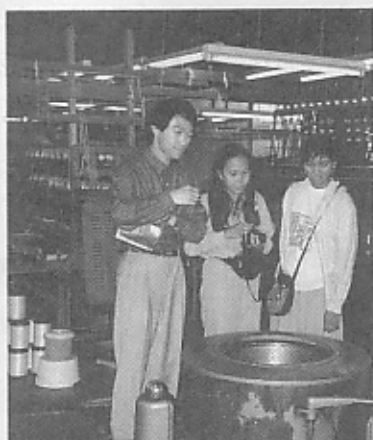
郡の地域開発局が保育者2人
分の給与として1,000 パーツ
（約 5,000円）を払っていま

すが、額が低すぎる上、遅配
がよくあります。このことは、
保育者が意欲をなくす、大き
な原因ともなっています。

研修

ゴイ
ピアップ

長野県（織物工場） → 東京（幼稚園）



<高沢織物>

どの工場でも、糸括りの作業まで機械化され、速くできるのにびっくり。その一方、在宅で織る方法もあり参考になりました。



<長野県情報技術試験場>

玉ねぎやみかんの皮を使った草木染めは、取り入れられそうです。日本のかすり織りの方法もぜひ試してみようと思います。



<駒場幼稚園>

自然の素材を使った子どもたち自身による教材づくり、野菜づくり、染めなど、CYRの活動を広げるヒントとなりました。

11



プット

埼玉県（有機農業） → 静岡県（有機農業）

タイでは化学肥料、農薬の使用で年々土地がやせ、さらに大量の化学肥料が使われています。農民の農薬による被害も深刻です。タイの被災村では有機農法に取り組みたいので、日本で有機農法を参考にしたいのです。



<大地を守る会契約農家>

4軒の有機農法を行なっている農家を訪問。堆肥のつくり方、自然の農薬を使った害虫駆除の方法など詳しく聞きました。2晩お世話になった農家で日本人の生活、習慣にもふれました。

<れんげ荘>

元在タイ職員の湯山さんも、現在農業を試みています。その佳代さんの案内で、自然農法の野菜、果物栽培を見学。また、日本とタイの米、野菜栽培のちがいなどについて話し合うことができました。この充実感！



カオイダンで蒔いた種はこれから……



真ん中は「アブサラ」の
レイアウトマン井奥さん。

ゴイ、ピアップ、プット → 倉敷



ここでも、岡山の会員小川さんに有機農法の菜園を案内してもらいました。夜は小川さん宅で温かいもてなしを受け、そのうえ泊めていただきました。

報告会

岡山 → 大阪



岡山報告会

岡山、大阪での報告会は、総会の内容とほぼ同じでした。雰囲気は総会よりなごやかで、質問もたくさん出たのはうれしいこと

＜撮影／高橋章三＞

参加した会員のお手紙から



総会終わって、ほっと一息ですね。お疲れさまでした。お蔭様にて私めも、みなさまの熱気に圧倒され通しなものでした。つまらない質問などして、貴重な時間を空費してしまい赤面しているところです。

恥の上塗りついでに一言。ああいう会場では事前に質問を提出させたほうが無駄がないと思います。とくに通訳の必要度が高い場合はです。時間が随分もったいないと感じました。—— 東京都・山田敏光



大阪報告会

ひとつのことを続けるということは大変なご苦労だと思います。世界が変わっていく

様子がよくわかります。カイダンやバンコクから来てくださった若い人たちのお話を聞くことができ、新しい国づくりにがんばっていらっしゃると感じました。

—— 京都市・村口公子

報告会でのお話を聞いて、ますますCYRに魅せられてしまいました。まずは、スタッフの方々が、笑顔で仕事のできる雰囲気が感じられたこと。それぞれの場所での実状にあった方法で、そこに生きている人々の連帯と自立を目指すものだという。そして、これからの活動の方向性に確固としたものをもっておられること。……CYRを知ることができ、ほんとうにうれしく思っています。

—— 大阪市・平沢葉子

とでした。総会同様、ピアップの堂々とした報告には、彼女をよく知っているつもり私たちがびっくりしました。(ゴイ)

☆日本の印象・感想

CYRで働く前、友人から、「日本人は信用できない。気をつけたほうがいい」とよく言われました。でも、日本人にも他人のことを考える人がいることが、働いてみてよくわかりました。今回も行く先々で温かい歓迎を受け、たくさんの刺激を受けました。(ゴイ)

日本はどこへ行くにも迅速な交通手段があり、便利でした。タイのような交通渋滞もなく、街のあちこちに花があり、とてもきれいで、気持ちよく過ごすことができました。(ピアップ)

東京以外の農村にも行けたことで、工業国家日本の農民の生活の一端を知り、見聞を広めることができました。(プット)

お世話になったみなさま、本当にありがとうございました。(ゴイ、ピアップ、プット)

芽が出てきたカンボジアの種

昨年12月から始まったカンボジアでのプロジェクトは、スタッフも増え、フル回転しています。活動の3本の柱の1つ、小学校建設はすでに終了しました。スタッフ、活動の様子など最新情報をお伝えしましょう。

1. 働く仲間たち



奥山卓司 CYKの代表。この7か月間に、1度蚊にさされ、足が象のようになったことはあっても、それ以外は病気もせず、5キロも増えました。長く地道に活動するための態勢づくりに力を入れたいと思っています。



ビムワリー 仕事の鬼、バーゲンの鬼と言われます。カンボジア語で値切る特技のせいでしょうか。元看護婦。好物は麺類。



野村美知子 日本での長い保育経験をカンボジアで生かしたいと思い、ただいま言葉の特訓中。調理師免許も生かしたい?!



事務所7月に移転

昨年10月に借りた事務所は1年契約でしたが、更新後は家賃が3倍になるというので新たに事務所をさがしました。プノンペン市内の南のはずれです。住所は32ページをご覧ください。電話はまだありません。



パシット タイの難民キャンプ等で保育の経験があり、10月からCYKに。おっとり、じっくり型です。単身赴任中。



左から、サーン 子ども大好き
の運転手です。特技は、おもちゃづくり。(上) プントゥアン 元カオイダンのCYRスタッフ。8月からCYKで事務、通訳をしています。サメット 本職は夜警。でも元大工の腕を遊具、教材づくりに発揮しています。(下) プナリット C

YKスタッフ一番の古株。運転手兼通訳。コソル あわてること、怒ることあるの?と聞かれます。一番若いのがぼくです。チュアン 宿舍のメイド。みんな私の料理をほめてくれます。サメットの妻です。

カオイダンで蒔いた種は
これから……

2. カンボジアでどんな活動が？

①サムロンクロム村での「子どもと母親の生活環境向上プロジェクト」

— プノンベンを中心から車で30分、プノンベン特別市ダンカオ地区にある村。11の集落に分かれている。人口約 3,000人。



家庭相談員による家庭訪問 — 村の女性の中から家庭相談員に応募した15名が、栄養、衛生、子どもの病気、下痢のときの手当て、保育などの知識のトレーニングを受けながら、家庭を訪問しています。訪問する家庭は、母子家庭および兵役や出稼ぎ等で夫不在の家庭（合わせて全家庭の半数以上）、栄養状態の悪い子どもがいる家庭等が中心です。



健康教育の第一歩として乳幼児の身長、体重を家庭相談員が計り、成長の記録をつけ始めた。

医療協力 — カンボジアでは、病院の治療費、薬代が高いため、病気になっても、売薬、伝統的な民間療法に頼らざるを得ません。こじらせて、死に至ることさえあります。そのため、9月から、11のすべての集落を対象に健康調査と健康教育を始めました。11月からはプノンベン市立病院の協力を得て、週2回、医師や助手を村に派遣してもらい、婦人科の移動外来も始めています。



保育所の開設 — 家庭訪問から、農繁期の幼児の世話を望む母親が多いことがわかり、7月15日村の中でも特に貧しい集落に保育所を開きました。建物は、村の集会所に屋根を付け足し、少し広くしたものです。現在、35人の子どもたちが来ています。朝6時半から午後3時半まで、朝・昼の食事、おやつ、内遊び、外遊びなどを日課としています。家庭相談員と母親がチームを組み、交代で保育をしています。

保育所の外観。



②ベアルサバウ村の「小学校校舎建設

CYKが外務省から建設協力を要請された、ベアルサバウ村小学校の第1校舎が10月15日、完成しました。今までの木造とちがい、柱の部分は鉄筋入りコンクリート、壁の部分はれんがを積んでその上からモルタルを塗ってあります。屋根はれんがと同じオレンジ色のかわらです。

「以前は教室の区切りもないような、木と竹の

③ プレイタトゥ保育所への協力

— プノンベン市に隣接するカンダール県のカンダールストン郡バンキアン地区にある村の1つ。プノンベン市内から車で1時間ほど。人口約 800人。



保育者のトレーニング — 5月から週2回、CYKのスタッフが定期的に保育所に行き、栄養を考えた給食の献立、子どもの健康チェック、保育日誌の記入を4人の保育者が自分たちでできるよう指導しました。

遊びの指導 — 遊びの大切さ、子どもの発達、保育の理論などを含め、日常の保育にすぐ生かせる遊び、おもちゃ、ゲームの紹介を多く取り入れています。同時に教材も作製しています。



資金援助 — 朝・昼の食事、おやつ、保育者の給与、教材費など、保育所の運営に必要な資金を援助しています。物価急騰のため、総額月 350ドルを約 500ドルに上げざるを得ませんでした。

問題点

村人たちは、カンボジア女性協会(WAC)が主導権をにぎっている保育所の運営について、不信感を抱いていることが、村人との話し合いの結果わかりました。不信感の原因の1つは、お金の動きをめぐる思惑にありました。この解決に向けて、村、WAC、母親、保育者、CYKそれぞれの代表からなる「保育所運営委員会」が組織されました。保育所は子どもたちのためにあることを確認し、母親が交代で保育所の手伝いに来ることになりました。今後は運営委員会を通して保育所を支援する形になります。

15

への協力」完了

— カンダール県キーンズバイ地区にある村。プノンベンから車で20分ほど。小学校は寺院の敷地内にある。

壁とトタン屋根の古い建物だったのに、5教室もある新しい校舎ができたのです。この校舎を見て、私たちはみな、わくわくしています。」と、5年生のパイ・モニーさんは感謝の手紙を寄せてくれました。700人の小学生たちは、新しい校舎で、はりきって勉強しています。



カオイダンで蒔いた種は
これから……

3. なぜカンボジアで活動を？

幼い難民を考える会（CYR）は、1990年からカンボジアで調査を行ない、1991年12月にはカンボジア政府と活動の契約を結びました。以来、カンボジアではCYK（Caring for Young Khmer）の名称で活動しています。では、なぜカンボジアで活動を開始したのでしょうか。いくつかの理由があります。

- ① カオイダンキャンプでの活動は、難民が自国に帰って自立するのを見届けて初めて完了する。
- ② 帰還地カンボジアで今までの活動の経験を生かし、難民が出ないような環境づくり、国づくりに協力したい。

4. これからの活動は？

16

- ①サムロンクロム村で
・保育所

現在ある保育所は、サムロンクロム村でもとくに貧しい3つの集落の真ん中に位置するトロピエンタヌンにあります。CYKでは、このような保育所を各集落に増やすのではなく、お母さんたちがグループをつくり、共同保育ができるようになってほしいと考えています。今ある保育所に、お母さんたちが参加しているのは、そのための準備で、保育のしかた、栄養などについて知識と経験を増やすためです。



移動外来。

- ・小児科、内科の移動外来
11月からプノンペン市立病院の協力を得て、婦人科の移動外来を始めました（14ページ参照）が、なるべく早い時期に、小児科、内科も始めたいと思っています。



ビタミンA不足で目の見えない5歳の男の子。母親が農作業で忙しいときは、置いていかれることもある。（サムロンクロム村）

- ③ 難民キャンプ以上に、カンボジア国内は、子どもたちをとりまく生活環境が厳しい。以上のような理由から、カンボジアで活動することを決定したわけです。

- ②ブレイトウ保育所で
・支援の継続

保育所への支援は、今年の12月でWACとの初めの契約期間が終了します。WACの報告書が提出された時点で評価し、継続するかどうか決定しますが、CYKとしては、将来、村の人たちだけで保育所を運営できるような方向の支援を続けたいと思っています。

- ・保育所の建物の建て替え

現在の建物は、1991年1月にユニセフが建てたものですが、早くも、あちこちに穴やすき間ができて、雨漏りもします。そのため、ユニセフ、WACと話し合い、できればほかの地域活動にも使える、長持ちする良い建物を建てたいという点で一致しました。支援継続が前提条件ですが、これを機に、現在保育所に入れないうちの子どもたちも受け入れられればと考えています。

カオイダンで蒔いた種は
これから……

私はこう考える

タイ・カンボジアでの新しい活動について

★カンボジアでの活動はいいことですが、厚生省が国際支援として本来やるべきこと。タイでの活動は、厚生省に加え、農水省も国際貢献としてやるべきこと。厚生省や農水省から補助金を一杯引きだせるようになりませんか。「公的責任」を回避させてはなりません。

★カンボジアでの母子の生活環境向上、保育施設への協力の活動、賛成です。保健所のような役割と存在が必要だと思います。看護婦、保健婦の養成までできればよいのですが。教育者の養成もやがて必要となってくるのではないのでしょうか。おそらく学校もないところから。とって私設の教育機関をつくることも諸種の事情から困難が予想されますので、さしずめ農業講習所のようなものができますれば。実験農場、加工所等ができればよいのですが。

(京都府・寺谷崇)

★カンボジアの活動では、とくに身の回りの衛生面での啓蒙が必要と思う。また、幼児期の栄養不足と愛情の有無が青年期に影響すると現地で聞いた。保育施設への協力は推進すべきと思う。

タイ農村では、自分の庭で、多種類の野菜を作れる技術を習得できれば、食生活が少しは安定するのではないか。その農業指導員が必要と思う。

(神奈川県・小出仁彦)

★カンボジアの子どもたちがみんな健康で、医療サービスを受けられるよう希望します。保育施設への協力は、現地の指導者の養成を希望。日本国内の家庭で使用しないものを送ったらどうでしょう。タイの農村でも、平和で食べることの心配もなく、子どもたちの教育が一人残らずできることを願っております。

(東京都・鬼頭璋子)

★カンボジア、タイでの活動、共に賛成です。現地の人たちの自立援助や保健衛生指導はまだまだだと思うので。彼らが自分たちでやっていけるまで続けるべきだと思います。実際に活動にあたっていらっしゃる方のご苦勞は大変なことと思いますが、「継続は力なり」です。私も徹力ながら、会を解散するまでは支援させていただきます。

国内での各国語による新聞「こんにちはCYRです」の発行も、異国で暮らす人たちにどんなになくさめになっていることでしょうか。これからも健康に気をつけてがんばってください。

★取り立てて書くまでもないと思うのですが、子どもたちの保護者に対する基礎的な保健衛生知識の普及や、その前提としての、成人を対象とした基本的な教育機関も充実させておく必要を感じています。

(大阪府・佐々木三千弘)

☆連絡のあったNHKのタイ・カオイダンキャンプを見ました。子どもたちの明るさに驚きました。草の根的な活動に関わる人々の働きには心から声援を送ります。これからの活動の上に神様の祝福がありますように祈ります。また、一人でも多くこの会を支援してくださる方がこれからも続いてくださることを願いつつ。山口の地で覚えています。

(山口県・藤岡シゲ子)

☆外国人の弁論大会でのインドの方の言葉が思い出されます。

インドに一つの昔話があります。釣りをしている老人の側へ腹ペコの子どもが来ました。「魚1匹ちょうだいよ」。でも、老人はあげようとはしませんでした。その代わり、竿と釣り針とをあげました。そして、魚の釣り方を教えました。

援助とはこういうことを言うのではないのでしょうか。いつの日か、私たちが日本を援助することがあるかもしれません。——私はこの言葉が忘れられないのです。

(東京都・山田敏光)

別れゆくカンボジアの友へ

—— カオイダン「希望の家」を閉園して ——

11月27日（金）朝、乾期に入り、少し涼しくなったカオイダンの空の色は淡く、美しく、心地よいそよ風が吹いていました。少しおめかしをして、手に手に皿とお皿とさじを握りしめた子どもたちがいそいそと保育園に集まってきました。

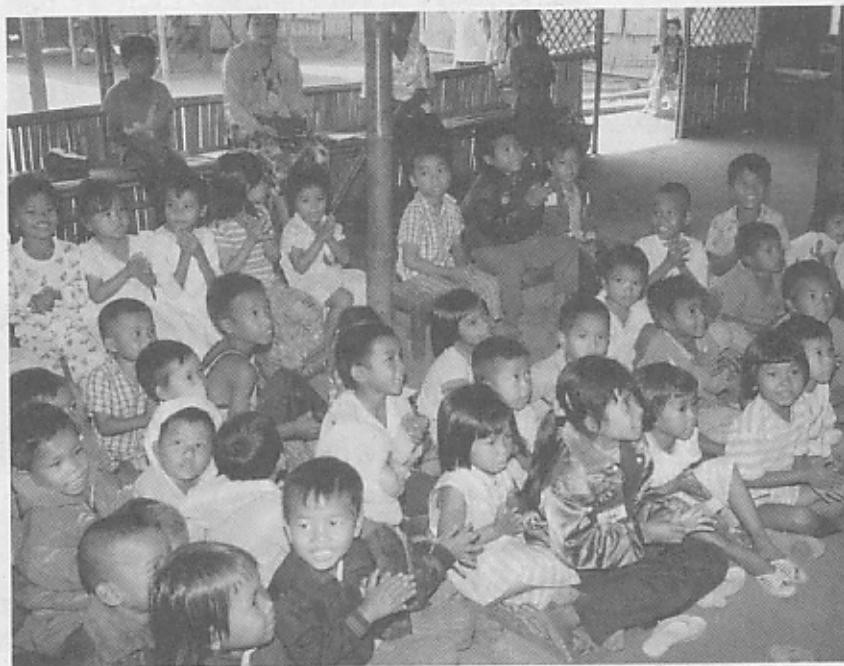
保育園を閉めるときに、子どもたちのためにささやかなパーティを開いたらどうかしら、と私たちスタッフの間で、誰とはなしに話していました。元気に保育園に来てくれた子どもたちに、最後の楽しい思い出をつくらせてあげたい。今まで私たちを支えてくれた子どもたちの笑顔に感謝の気持ちを贈りたい。そんな思いでした。

18 そしてまた、13年目に入ったカオイダンキャンプでの活動が、今年限りで終了するという事実、私たち自身けじめをつけ、すでに始まっているカンボジアと、タイ国境の村での活動へ、

あらたな心の旅立ちをするという大きな意味もありました。

「今日は、CYRの保育園でさよならパーティがあるよ。何だかおもしろそうだし、ごちそうも食べられるらしい。」 そんな話を聞きつけて集まった子どもたちは60人あまり。うれしいことに、元カンボジア人スタッフも、子どもたちの昼食づくりや、会場準備の手伝いに駆けつけてくれました。日本から、深水正勝代表代行、ボランティアの沼佐さん、青野さん等お客様も交えて、9時30分、「さよならパーティ」は始まりました。

最初に、深水神父から、子どもたちとお父さん、お母さん、カンボジア人スタッフへ感謝をこめた心温まるお話がありました。続いて、元保育者とCYRスタッフによる、カンボジアの



先生たちの熱演に子どもたちは大喜びで拍手していた。



保育者とCYRスタッフの必死な

昔話「ソピアップとカミナリちゃん」の上演。初めて見る先生たち（保育者）の劇に、子どもたちは興奮しっぱなし。劇の経験などまるでない先生たちが、どぎまぎしながら必死に演ずる姿に、抱腹絶倒。ビデオがあればよかったねと、後悔ひとしきり。次は、カンボジア、タイ、日本それぞれの国の歌合戦。なんといっても、一番上手で元気だったのは、やっぱり子どもたちの歌でした。いつも口ずさんでいた歌を、背筋をすっと伸ばして歌っている姿は自信に溢れていました。待ちに待った昼食会のメニューは、山と盛りだごはんに野菜炒めと目玉焼き。デザートはすいかとオレンジジュースという豪華版でした。こんなに食べられるかしらんという予想を裏切って、食欲旺盛な子どもたち。気分は最高潮のようでした。

最後に、カンボジアスタッフの責任者であるコンモムから話があり、ささやかなプレゼント（カンボジア語のアルファベット表、竹とんぼ、折り紙）をもらった子どもたちは、お腹いっぱい、気持ちも大満足で帰って行きました。

子どもたちは、この日のことをきっとすぐに忘れてしまうでしょう。カオイダンで過ごした日々も、記憶のなかから少しずつ消えていくかもしれません。子どもはいつも今を、そして明日を生きています。だからこそ、この子たちは強く、たくましく生きていけると信じられるのです。いつの日か、この子らの誰かと再会し、元気に成長した姿を見たいものです。

カンボジア人スタッフへの感謝の気持ちを、もう一度贈ります。この日集まってくれたあなたたちは、とてもうれしそうで、仕事をする喜び、子どもへの愛情が伝わってきましたよ。人の弱さを知り、思いやりの心を持つこの子たちが、祖国へ帰っても健やかに育っていただけますように、どうか大人であるあなたたちに頑張ってもらいたい。あなたたちならそれができるはず。

私たちも、あなたたちから学んだことを、次の活動へ生かしていきたいと思います。いつの日か会える日、いつもの笑顔で会いましょう。ありがとう、お元気で、さようなら。

CYR/カオイダンスタッフより



お待ちかねのお昼ご飯。もりもり食べて、大きく、たくましく育ってほしい。

高校生にとっての「難民」

●知らないことが多すぎて

▼スライドでやった10歳の少女の一日の生活を見て、とても驚いた。学校に行きたくても行けない子どもや、電気が家になんて、とても日本では考えられない。もし僕が難民だったらどう思うだろう。水も車で配給されるか、井戸水を使う程度で、食べるものも粗末で、遊ぶことは水遊びくらいなものでは、とても僕の今の生活からは考えもつかないことだ。もう少し、難民のことを考えてみなくてはいけないと思った。(2年男子)

▼同じ人間なのに生まれた国が違うという、ただそれだけの理由であんなにつらい生活をしている人がいるんだと初めて知った。戦争のせいで祖国から離れたところで生活しなくてはならないなんて、つらすぎる。今まで「難民」と聞いても、私とは関係ないと思っていたが、急に身近に感じられるようになった。

私は、学校に行くのがいやだとか、勉強はめんどくさいと考えているのに、勉強したくてもできない人がいることを聞いて、自分自身を考え直さなくてはと思った。(2年女子)

▼講演を聞いて、今の日本は本

当の意味で幸せとは言えないんじゃないか、そう思った。僕らが本当の意味で幸せになれるように、難民の人たちもまた同じように幸せになれるように、飛んで行ってあげたいと思った。僕は、物に不自由しないでここまで生きてきたし、そのことを価値のないものとは思いたくないが、こんな状態の日本なら、難民の人たちに見せたくないし、見せないほうが良いと思う。思うことは、まだまだ多くあったが、いつかこの思いを何かにぶつきたい。(2年男子)

▼カンボジアや周辺の国々について、私はあまり知識がなかったし、難民についてもほとんど知らなかった。今日は考えなくてはいけないこと、知りたいことがたくさんできた。カンボジアの政治について、難民の生活をよくする方法について、もっと知らなくてはいけないと思う。



ソコンちゃんの家族と家。

今日はそのきっかけになった。
(2年女子)



食事はスープかけご飯のことが多い。

●不自由には見えない

▼難民の生活は、それほど不自由はしていないと思いました。水が足りないという一方で、水浴びをする時には流したままだったみたいだし、着るものについても、ミシンを使って自分でつくれるようだったし、また野菜なども、作って売るくらいあるのなら自分たちで自給できるはずだし、電気がないのはしょうがないけれど、キャンプから出るのではなく、そこが1つの国だと考えていけば、いつか豊かになっていくのではないのでしょうか。それから、働きもしないで配給を待っているのではなく、日本人が技術を持っていて、働いていない人をなくさせれば、もっとよい国づくりができると思います。

(2年女子)

先頃、静岡県立長泉高校の国際理解の講演の講師として、幼い難民を考える会の事務局長・峯村里香が招かれました。「カオイダン、ソコンちゃんの1日」というスライドを見たり、日本に住ん

でいるラオスの中学生の作文（会報 No. 24より）を聞いて、高校生たちはどんなふう感じたのでしょうか。自分との比較、差別、自分がすべきことなど、感想文のいくつかを紹介します。

スライド撮影／飯田照明

▼飢え、干ばつなどのイメージがあったが、“貧しい”とはひとつ違うものだと思った。それぞれの地域にはその地域の人々の生活があるので、われわれが同情することには値しない。

（2年男子）

●差別はよくないけど

▼前にベトナム難民が日本に多く来たことがありました。そのとき私ハッキリ言って、いやでした。今もそう思っています。私の考えが古いのかもしれませんが、何か気持ち悪いです。確かにあの人たちは、国、生活を選べません。だからといって自分の国を捨てて逃げてこないでほしい。もっと自分の国でやってみてほしい。最近、日本には外国人労働者がたくさん来ています。私は、なんか日本が日本でなくなってしまうんじゃないかと思っています。

（1年女子）

▼日本で他の民族が暮らすことは、とても大変なことだと思う。なぜなら日本は島国だから、他人が自分と違うと、むしろに毛嫌いする傾向があるからだ。その中で、個人として強く、くじけないで生きるということは

とてもむずかしく、また精神的な面からみても、かなりの苦痛が生じてくると思う。自分を見つめ、見失うことなく生きている人はすばらしい。誇りを持ち、自分の国を愛し、日本に国籍を移して、いろんな差別を受けても日本人を憎んでいないラオスの女の子は、僕たちよりずっと大人で、心の豊かな人だと思う。僕たちは理解を深め、難民の人に対して自然に接することが大切だと思った。（2年男子）



難民キャンプの中にある小学校。

●何ができる？ 何かをしたい

▼難民の人たちは日本と比べると本当に貧しい暮らしをしていた。日本人は発展途上国の人をやたらと差別する。私にもそういう偏見がある。国際化時代といわれているのに、日本人は先進国との間のことばかり考えている。そもそもなぜ難民が生じたのか、その根本をたどれば、自分勝手な人々の起こした戦争

にないだろうか。第2次世界大戦で敗戦国となった日本が、今は世界でもっとも発展しているのに、「援助をする」という言葉に片づけられてしまっている対処しかしていない。その援助もお金や物資だけではないか。講師の方のように、心のこもった援助というものを行っているのかという疑問が浮かんでくる。

（2年女子）

▼キャンプ内のことについて日頃ニュース番組などで簡単に片づけられてしまうことが、今日は詳しく聞いて、その重要さが少しわかった気がした。日本人のボランティアは、お金を出すだけ、集めるだけで使い道などに興味をあまりもたないので、峯村さんのような人にどんどん話を聞き、できればキャンプを視察してくるといいと思う。僕も1度キャンプを見て、実際の現場を見て考える機会がほしい。僕ら日本人には、世界で困っている人々を助ける力があるはずなのに助けようとしていない。見殺しである。これは“国際人”として、人間として、男として恥ずかしいことなので、自分でできることを見つけ、行動していきたいと思う。（1年男子）

●私が入会したのは……

♡子どもたちのために

小児科医になり8年間、病気というハンディを持った子どもたちと接してきました。しかし、雑誌に載ったCYRの記事を読み、世界にはもっともっと多くのハンディを持った子どもたちが大勢いることも知りました。そういう子どもたちのために、少しでもお役に立てればと思っています。また、日本に住んでいる東南アジアなどの方々と仕事から接する機会もあるのですが、その方たちのお役にも立てればと思います。

(東京都・小林真澄)

♡自分にできることから

難民問題は政治問題でもあります。そして、今や環境悪化が拍車をかけています。弱者である女性や老人、とくに抵抗力のない子どもが一番の被害者なのです。昨年7月、アンコールワットに行き、周辺の子どもたちと接し、自分でできることからと思いました。

(神奈川県・小出仁彦)

◇生きることすら大変な人たち

私自身は、衣食住に不自由なく暮らしています。衣食住が安定しているので、どのように生きるかという次の課題を考えることができます。それは、たまたま私が日本の中流家庭という恵まれた環境に生まれたからで



す。本質的には私たちと同じはずなのに、衣食住が不安定で生きるという課題すら大変な人たち。そういう人々に、たまたま恵まれた個人として、何かできることはないかと思っていました。そんな折りにある本で貴会を知り、興味を持ちました。

(東京都・平田由美子)

♡信用できそうなので

看護雑誌に載っていたCYRの記事を読みました。以前から自分にも何かできることはないかと、ずっと考えていたのですが、インチキなものにひっかかるのもばかばかしく、どの会に入ったらよいのかわかりませんでした。今回は信用できそうなので入会しようと思いました。自分が看護婦なので、できれば現地へ行き、いろいろなお世話をしてみたいと思っていますが……。夫や子どももおり、また妊娠中なので、今は自分にできることから始めなければと思います。

(岡山県・竹内昌代)

◆母として、日本人として

物が溢れ、どんどん捨てられていく日本、着る物も、食べる物も、教育を受ける機会もなくうつろな目でたたずむ難民たち。自分にも何かできないものか、いくつかの団体に電話したのは

会員

みなさんの

5、6年前のことです。友人から「幼い難民を考える会」を教えてください、資料を送っていただいたのですが、自分の生活や仕事に追われ、遠ざかってしまいました。忘れたわけではないのですが……。私も子どもをもつようになり、母として、日本人として、世界に目を向け、お役に立てればと思っています。

(千葉県・木原美和)

♡おさそいの文面に共感

友人からこの会のことを知りました。リーフレットの写真の子どもたちの瞳が伝えるもの、会へのおさそいの文面に共感を覚えました。今、具体的に何か行動することはできないけれど、会の存在を知ることができたことをうれしく思いました。

ちょうど、そんな時、テレビで不法滞在者の子どもに予防接種がされていない現実を知り、胸が痛みました。日本人の子どもたちと同じように生まれてきた何の罪もない子どもたち。入会することによって、いろいろな現実を知り、考えることができると思います。

(山梨県・藤城雄治)

♡未来を担う世代の力に

朝日新聞紙上でCYRを知り

お便り

登場

ました。カンボジアで活動しているNGO(民間団体)は少ないと以前聞いたことがあります。CYRがカンボジアを対象として活動していることを知り、興味を持ちました。難民問題に興味を持ったのは、石川幸子氏の著書『東南アジアの風に吹かれて』を読んでからのことです。一アジア人として、同時代に生きる子どもたちのことを“考える”ことで、微力ながら未来を担う世代の力になれればと思います。(静岡県・小林栄樹)

◇他人ごとには思えない

カンボジア、そのほか第三世界の国々で、国を追われ、苦しい生活をしている人々のことを知るにつけ、日本人として、何か自分にできることがあれば協力したいと思っていました。特に幼い子どもたちが、少しでもよい生活ができればと思います。1歳の子どものを育てている私には、子どもの問題は他人ごととは思えないのです。何もできないかもしれませんが、お仲間の一人に加えていただければ幸いです。(東京都・辻本すみ子)

◇悲しい事実を知って

難民については、たまに報道されるテレビのニュースなどで

しか見たことがありません。その悲しい事実はテレビを通してです。あまり実感がありません。でも、心の中に、頭の中に、だんだん光景が浮かび、気持ちが行動へと動いてきました。そ

んな時、何気なく、生まれて初めて図書館に足が向いたのです。図書館には難民問題についての展示がありました。すごく感動して、必ず会員にと思いました。

●総会に出席できませんが……

▼今後もそれぞれの国の文化や歴史を踏まえたくうで、子どもたちへの援助を続けていってください。応援させていただきます。(東京都・高野紫)

▼教育は人権の基礎、教育を受ける機会をすべての子どもたちにと祈っております。

(北海道・福田洋子)

▼カンボジア国内でもこれまでの経験が生かされますよう、願っております。日本ではなかなかわかりにくい状況を私どもにもお知らせください。

(東京都・山田久美子)

▼帰還難民が、少しでも希望をもって帰国されるよう支援し、カンボジア国内では、働く母親たちのためにも、保育の充実を期待します。また、現在のカンボジアの姿を日本国内の人々に伝えていく活動も重要かと思えます。(大阪府・平沢葉子)

▼変化していく時代に対応していかうとしているのがうれしいです。CYRのこれまでの方針が、ますます生きて人々の支えとなりますように。

(東京都・嶋本操)

▼一人一人の人権をもっと真剣に、大切に考えていかなければいけないと切に思います。

(東京都・塚原のりこ)

▼もっともっと地域での活動を活発にしたり、活動範囲をひろげていってほしいと思います。

(長野県・轟英子)

▼今までのやり方を続けていって良いのではないのでしょうか。両国とも国情が安定すれば、別の仕事も求められてくるかもしれませんが。

(東京都・田尻陽子)

▼「こんにちはCYRです」9号のトルオン・ティ・トランさんの作文、素直な文面で含蓄深い内容でした。一度、彼女のような子どもたちと会ってみたいものです。(大阪府・李姫子)

▼世界の日一日の動きが複雑になり、今、日本人は特によくよく考えての行動をとります。

(東京都・田中周子)

▼「アブサラ」面白く読ませていただきました。カンボジアへの帰還については、とても気になっているのですが。

(東京都・森律子)

友だちができた!! 楽しかった長野ホームステイ

長野県の円福友の会とCYR共催のホームステイも、今年で5回目。初めて参加する子、もう何回も長野に行っている子、それぞれいろいろな期待や不安

●楽しい思い出

ながのりょうこ

ソー・ボンナリ

わたしは、森さんの家へとまりました。オルゴールかんやガラスかん、カラオケに行きました。ロープウェーにもまりましたがぜんぜん速くありませんでした。オルゴールかんはいろんなオルゴールがありました。わたしがいちばん気に入ったのは、にんぎょうやぬいぐるみのオルゴールです。ガラスかんには、おさらやコップがありました。カラオケはとちゅうでねてしまったけど、とてもたのしかったです。とってもたのしいながのりょうこでした。

私の思い出が宝になった

ソック・トゥイポウ

「うわぁ、きれい」と、松橋さんが私を乗せて車を家に走らせている時、車の中から見える山に囲まれた、長野県の景色にひかれました。

私の泊まる家は松橋さんの家です。子どもは中2の美穂ちゃんと小6の由紀ちゃんです。初めよそよそしくしていた私たち

を胸に、出かけました。その子どもたちを、豊かな自然と地元の人々の暖かい愛情が受けとめてくれました。在日のベトナム、ラオス、カンボジアの子どもただけれど、時間がたてば、前々から知っている人のように、お互いの学校のことや住んでいるころの話をしたりして、すぐ友だちになりました。私は松橋さんの家の朝・昼・晩の食事をいただいて、とてもびっくりしました。野菜は自分の畑でとれた物で、ほとんどのごちそうが新鮮で自家製の物だったのでおいしかったです。(略)

松橋さんたちの家族と過ごした2日間は短かったけど、私にとっては最高にいい思い出になったと思います。この思い出を心の中にいつまでも残しておきたい宝物の一つとなりました。

長野のホームステイ

フィンント・ユエン

日本人は、みな夏になると田舎へ帰る人が沢山います。私たちは故郷へ帰りたくても帰れないので、毎年、長野へ行けるのを楽しみにしていました。一番よかったことは、夜、お庭で花火をしたことです。雨がふりそうだったけど、花火がとてもきれいでした。空には、星も輝いていて最高な夜でした。ホームステイは2泊だったけど、家

ちは、祭りを見たり、山へ行ったり、楽しい夏休みを過ごしたようです。そして何よりも、地元の子どもたちとの友情がいちばんの思い出になりました。

族の人とも仲よしになりました。長野のお母さんとお父さんは、すごくやさしかった。私のわがままも聞いてくれました。3泊4日は短かったけど、たくさんの友だちができて、いい思い出もつくれてよかったです。

ホームステイ夏の思い出

ワン・チャリヤ

初めてバスに乗った時、新井さんってだれかなって思いました。ずっと乗っていたら、本人がすぐそばにいました。私、こんな人と友だちになれるかなと思ったけど、円福寺についたときは話とかしたらすっかり友だちになりました。

朝はとてもみんな早かったです。ラジオ体そうに行ったら、知らない人が私の悪口を言ったのが聞こえました。私はその時いやな気持ちでした。でも麻里ちゃんはなぐさめてくれました。

それからもうすぐさようならの時、少し心の中がさみしくなりました。電車に乗ったころ、もう麻里ちゃんはないでした。私は麻里ちゃんにハンカチをあげました。さようなら真夏の思い出、さようなら友だちよ。



●友だちと出会えた夏休み

すぐ友だちに 新井麻里
ホームステイ、今年初めての私は、どんな子が来るのか心配で、気が合わなかったら……が一番心配でした。思ったよりもやさしい子で、円福寺で会った時からすぐ友だちになりました。

1日目は近くの公園で遊び、2日目は須坂のサマーランドやびんづる祭りに行きました。カンボジアのことも話してくれました。でも一つラジオ体そうに

いっしょに行った時、日本の人に悪口を言われたのがいやだったです。ふだんとは一味ちがう夏休みが過ごせてよかったです。

私の宝物 橋詰美貴
小さい頃の宝物といえば、ぬいぐるみや誕生日プレゼントでもらったシャーペンやノートでした。どこにでも売っているような物が宝物でした。今、17歳になって見つけた私の宝物、そ

れは友だちです。お金では決して買えない、友情です。今年もまた、その友だちに会うことができました。

私とみんなは長野と東京と距離が離れています。でも距離が離れていても、友だちだ!! といつでも胸を張っていたいのです。私はみんなが好きだから、離れていても、忘れません。その宝物を傷つけずに、大切にしたいです。

25

カンボジアの子どもたちに愛を

熱唱するブッチ神父。



去る6月28日、「明星音楽会」が、東京世田谷区にある三軒茶屋カトリック教会で開かれました。このコンサートは「子どもたちに愛を」をテーマにしたチャリティコンサートで、世界の

飢えや病気に苦しんでいる子どもたちを少しでも助けようと開かれているものです。

2回目の今回は、社会的、経済的に不安定な状況の中で犠牲になっているカンボジアの子ど

もたちのために企画されたもので、クラシックからラテン、カンツォーネまで、バラエティ豊かなプログラムは聞いていても楽しいものでした。同教会のジョバンニ・ブッチ神父は、その美声で、独唱に、またドイツ語のデュエットにまで挑戦し、会場を盛り上げていました。

この音楽会の収益金60万円を、幼い難民を考える会にご寄付いただきました。カンボジアでの子どもと母親の生活環境向上プロジェクトに使わせていただきます。実行委員および、出演者の方々に紙面を借りてお礼申し上げます。

ボランティア

ボランティアの活動が、最近注目を集めています。興味はあるけれど、何をしたいのかわからないという方も多いようです。そこで、100人を超える若い難民を考える会の現役ボランティアに、活動の企画から実践までを紹介していただきました。あなたもお仲間に入りませんか。

▼毎週1回事務局に通っているうち、10年以上たちましたね。ベテランのお3人。

現場と会員をつなぐ事務局の助っ人



手紙、はがき、他団体からの資料は1週間のうちに山と来ます。それを整理して、資料をカード化しようと思っています。

26



会員カード・名簿の整理、問い合わせの返事、ワープロ打ちなど地味な仕事が多いですね。でも返事を書いた人が入会してくれるとうれしくなります。私たちは定期的ですが、時間があるときに事務局に行って手伝ってもいいですよ。ワープロ打ちや、テープ起こしを自宅でなさっている方もいらっしゃいます。

アジアとふれあい 開かれた社会をめざす



月に1回くらい、公共の施設を借りて、インドシナの料理会を開いています。ぜひみなさんも参加してください！

近くに住むカンボジア女性と一緒に週1回、日本語の勉強をしています。まだ、日本に来て2年なので、わからないことも多いようで、時々相談にのることもあります。

ピクニック、バーベキューなどを、インドシナの人たちと一緒に楽しんでいます。仲間に入って、“友だちの輪”広げてみませんか？

躍

活

中

!

▶名古屋で料理教室を開いています。



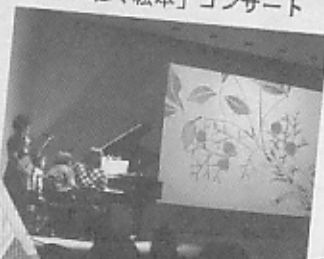
▼「若い難民のための」コンサート



演奏家、指揮者など専門家の方々のご協力をいただいでコンサートを開いています。収益金はもちろん会へ寄付します。



▼「聴く絵本」コンサート



住まいの近くで料理会やガレージセールを開いています。すきなことを活かして資金集めをする方法、ほかにもあるんじゃないかしら。

会の活動資金を集める



秋の、CYRが主催するバザーには、80人以上の仲間が集まってきます。そのほか、教会やほかの団体が主催するバザーが、年間10回程度、会が出店するので、場所と日時の都合がよいときに手伝っています。車を持っている人なら、荷物を運んでくれませんか？

27



海外の報告書、資料など「広報の素」の翻訳をやっています。最近、海外の活動報告書が英語やタイ語でくることが多いので、もっと手伝ってくれる人がいるといいんですが……。

会の活動を広める



近くに会場を見つけて、パネル展をやってみました。カンボジアのことや、会の活動に興味をもってくれる人が少しでも増えれば、と思っています。

木曜日夜
土曜日午後
ボランティア集合日！
参加ご希望の方、事務所までください。



発送作業は1、2か月に1回くらい。ただの力仕事、単純作業にみえますが、宛て先のシール貼りひとつでも、なかなかむずかしいんですよ。会からのお知らせも、発送をしないと届かないでしょ。

初めての挑戦！ 小学生向け展示

岡山カトリック教会の原田神父のご紹介をきっかけに、ノートルダム清心女子大学付属小学校の保護者会からの要請で、10月25日に「カンボジアっ子の遊びと生活」という企画に取り組みることになりました。

小学生向けの企画は初めてだぞ。さて、どうしたらいいかなあ？ そこで思いついたのが紙芝居。「ソピアップとかみなりちゃん」というお話です。

前日に会場準備をしていたらひとりの女生徒がやって来て、上演を始めました。それがとてもうまいのです。きちんと声に抑揚をつけたり、緩急使い分けたり、役によって声を少し変える工夫をしてるし……。たいしたものです。この紙芝居は岡山支部代表の成澤貴子さんがつくったものです。

この企画のために、東京のボ



紙芝居を作り、演じたのは成澤さん。



CYRの教材で遊ぶ子どもたち。左は岡山の会員で、今回の企画者の小川さん。

ランティアの人たちも素敵なパネルをつくってくれました。カンボジアのお国紹介と、子どもたちの暮らしぶりを紹介したものです。

子どもたちは保護者と一緒だろうと思っていたのが、実際は友だちと一緒にだったり、高学年の子はあまり来場してくれなかったりと、予想とは違いました。なにを伝えたいかというツメが甘かったため、内容が散漫になりました。表面しかでられなかったようです。会場にキムというカンボジアの弦楽器を演奏できるように置いておきましたが、乱暴に扱う子もいて弱りました。工夫が必要でしたね。

カオイダンキャンプで作製した教材は子どもたちに人気で、



東京のボランティアが作ったのが、「カンボジアのお友だち」とカンボジアを簡単に紹介したパネル。

思わずやってみたくなる魅力があるようです。子どもの関心をひくものは、万国共通なんですね。教材を作製したCYRの確かな目を感じました。

この企画、来年以降もぜひ続けてほしいとの声もあります。今年の反省を生かして、よりよいものをめざしたいと思っています。（記/小川輝樹）

お便りは
カオイダンの子どもたちの
笑顔このせて

すべての子どもたちにこんな笑顔でいてほしい。それが私たちの願いです。

カラー 3枚



白黒 2枚

☆収益金はカンボジアの子どもと母親のためのプロジェクトに使われます。

ハガキ 5枚 1組 500円 (送料72円)

お申込みは

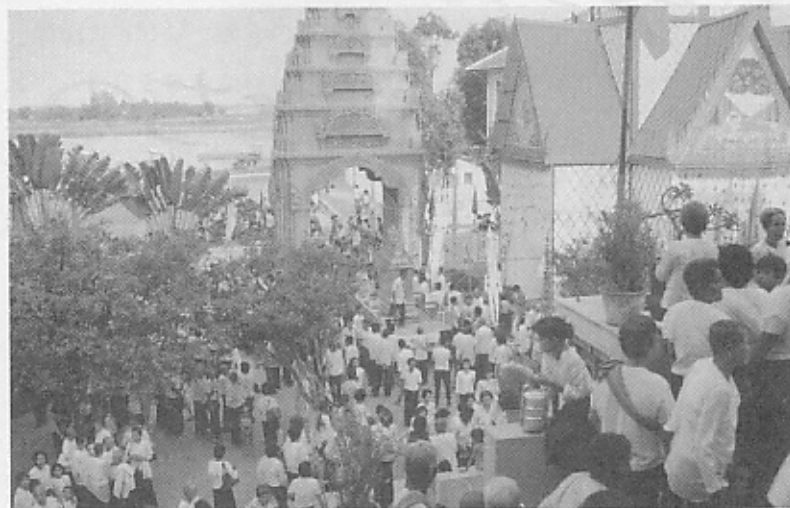
幼い難民を考える会

東京都新宿区南元町 6-2 ☎03-3353-9947



僧侶が歩けば……その4

——タイ、カンボジア行脚の旅 洪井 修



完成したボンメンのための塔にお参りする人々。

1991年1月7日

今日から日本語教室の始まり、
のはずだった。しかし……。

日本語教室を開く申請をルナ
セイ（ヘンサムリン政権の本部。
政治・経済・文化・宗教などす
べての方面に力を持っている）
へ出していた。その返事は「国
内はまだ内戦状態で混沌として
おり、日本語教室を開く時期で
はない」というものだった。

英語、タイ語、フランス語、
ロシア語、ベトナム語はすでに
許可されているのに、なぜ日本語
がダメなのだ。国内が混沌とし
ているというのは許可しない
理由にはあたらない。なにも授
業料をとったり、大勢の人を対象
に教えるわけではないのだ。こ
の国にはまだ、日本語の本も
なければ、教える教師もいない

のである。日本語教室を開かさ
ないのが、いったい何の利益に
なるというのだ。まわりの人た
ちはみな、知り合いの坊さんま
でが、金を持っていかなかった
からだ、と言っていたが、この
国では何かをお願いするとき
には、きまって金だ。もし仮に、
金で解決できたとしても、官僚
を太らすような行為は、絶対で
きるわけがない。権力を握るに
はそれ相応の資本投下が行なわ
れる。握れば給料の数十倍、数
百倍の金が転がり込んでくる。
それが、シアヌーク政権時代、
ロンノル政権時代の腐敗した官
僚機構を生み、それに反対する
勢力として、あのポルポトを生
んだのではなかったのか……。

手紙を持って、大僧正に相談
に行く。手紙に一通り目を通し

てから、ウーン、キビシイナ、
と一言おっしゃった。とにかく
正月（カンボジアの正月は4月
中旬）まで待ちなさい。その間
に手を尽くしてみるからとのこ
とであった。募集した生徒たち
には事情を説明して、謝らな
くしてはならない。ゆううつだ。
まったく、ゆううつだ。

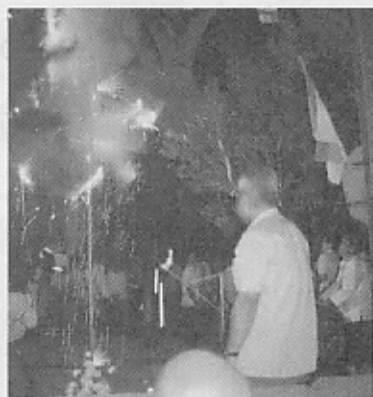
ボンメン

1月の半ばくらいから、急に
寺の中があわただしくなった。
若い坊さんたちが一生懸命に木
を切ったり、削ったりしている。
2週間後に行ってみると、なん
となんと大きなやぐらが建っ
ているではないか。地方からも、
若い坊さんが20名ほど手伝い
に来ていた。ボンメン。ボンと
は祭りのことである。メンとは
火葬する広場のことをいう。
そういえば、今年の6月にカン
ボジア仏教界のナンバー5に位
置する老僧が亡くなった。その
棺の中に多量の石灰を入れて、
遺体を腐敗しないようにしてい
たのを思い出した。みながつ
っていたのは、その老僧を火葬
するための建物だったのだ。

そんな訳で、私も手持ちの電
動工具を持って仲間入りするこ
とにした。ここの坊さんはよく
働く。これ以後も、坊さんたち
で階段を作ったり、本堂、食堂、
道路の補修までやっているのだ
である。ここでは、働かぬ坊さん
は認めてもらえない。約3週間

で全体の骨組みができた。2月の初旬にはいよいよ棟上げ式である。朝早くから楽団が来て、威勢よくカンボジア楽器を打ち鳴らしていた。午前8時。最初の柱を建てる儀式が始まった。エッセ、エッセという掛け声をかけながら、ロープと人力で柱を建てるのである。なかなか思ったところに決まらない。こっちに引け、もう少し手前だ、こっちだ、あっちだと、掛け声より罵声に近い言葉が行き交っている。そんなこんなで主要な柱12本が建った。高いところでの組み立て作業には半年ほどやったことのある齋職が役に立ち、1時間ほどは快調に進んだのであるが、体力が続かないのと、足がこってしまった。ガタガタと震えが止まらない。1台のワゴン車が山門の前に止まり、日本人観光客が降りてきた。しめた、これで大義名分ができた。日本人観光客が来るといつも私が寺内を案内するのだ。みなは、クスクスと笑いながら、私が降りてくるのを見守っていた。

2月10日、ボンメーンの日。午後3時、最初に、今までおさめていた棺から新しい棺へ移す儀式があり、一人一人が花を新しい棺の中にお供えした。それから、30分ほどの読経の後、行列が始まった。霊柩車の前に大きなスピーカーを2つも取り付け、葬儀用の音楽をガンガン流す。役員、親族、霊柩車、僧侶衆、一般信者の順で街頭に出る。その葬列は、300～400メートルにも及び、わずか2キロ足らずの道程であったが、2時間はたっぷりとかかった。霊柩車が火葬のための塔に横付けになるとすぐに棺を塔の中央まで運び、安置した。夜の8時頃より、近在の寺の僧侶が集まり、4人1組で供養の経文をマイクをボリュームいっぱいにして唱えていた。これが夜中の2時まで続いたのである。翌日は、夕方4時からいよいよ火葬の儀式である。黒塗りのトヨタのクラウンが次々と道路に横づけされた。国会議員、副首相、ルナセイの幹部職員と、そうそうたるメンバー



最後に点火された花火。

である。全員揃ったところでドラが鳴り、最初に白装束に身をかためた親族が献花し、次に政府幹部、近在の僧侶衆、一般の信者と続いた。読経の後、仕掛けておいた花火で釜の火をつけた。みごとに点火すると、煙突から黒い煙がモクモクとたちのぼった。いっせいに、ワーという歓声があがり、続いて仕掛花火、打ち上げ花火があげられ、境内は歓声と煙の渦の中に完全に埋没した。この饗宴も予算の関係で5分ほどで終わった。

翌日納骨され、すべての行事は終わったのであった。

(筆者プロフィール)



演劇、農業の経験を経て仏門に入る。87年7月タイに渡り得度。ベトナム戦争の頃、多感な青春時代を過ごした筆者は、非業の死を遂げた何百人もの人の霊を弔うため、インドシナに行くことを決心。

89年12月にタイからカンボジアに向け行脚の旅に出発。現在は、プノンベン市内のウナロム寺に住み、日本語を教えている。



子ども日本語教室の生徒たち。

事務局からのお知らせ

お願い

支援の輪を広げてください

今号の会報でお伝えしたように、カンボジアでの活動順調なすべりだしをみせています。しかし、悩みの種は、何といってもお金がかかることです。カンボジアの諸物価の急騰は、庶民を苦しめ、私たちのような小さな民間団体の事業にも大きな影響を与えています。

昨年度(1991年度)CYRの全収入の内、会費が占める率は、わずかに約5パーセントでした。活動に必要な資金のほとんどを寄付、補助金に頼っています。会費はもっとも基本的な収入で、会の土台ともいえるものです。月額500円の会費据え置きのまま会費収入をあげるには、みなさまのご協力が必要です。

どうぞ“会員を増やすキャンペーン”にお力を貸してください。

・お友だち、お知り合いをぜひ

会員に!

会費未納の方は、ご納入を!!

予告

☆1993年から

会報が生まれ変わります!!

—— タイトル募集中! ——

難民キャンプから出発した、CYRの活動は、今年大きく飛躍しました。それに伴い、会報もまた、“大変身”を遂げたいと思っています。(今回、少し変わったことにお気づきでしょうか?) そのための、みなさまのご意見、アイデアを同封のハガキで、お寄せください。

新しい会報にふさわしいタイトルも、お待ちしております。

☆会報づくりにご参加ください

1 地方特派員 東京事務所が遠い方は、会員に知らせたい催し物、講演会などの様子を書く特派員になりませんか?

2 編集者、ライター、レイア

ウター、デザイナー、イラストレーターの方々と、CYRの活動、会報に興味をお持ちの方、ぜひ会報づくりにご参加ください。ご連絡は、東京事務所までお願いいたします。

☆第25回バザーへのご協力

ありがとうございました

10月25日(日)、第25回「カンボジアの幼い子どもたちのためのバザー」が、東京・渋谷区立千駄ヶ谷区民会館で開かれました。同会館でのバザーは2回目で、また天気にも恵まれたこと



もあって、前回より出足はよかったです。ボランティアの方々も約80人がそれぞれの売り場、持ち場で大活躍してくださいました。収益金は1,080,809円でした。ご協力ありがとうございました。

発行：幼い難民を考える会

発行人：深水正勝

編集：石井じゅん、長谷川容子 編集協力：上田広美、佐伯靖子、工藤綾子、沼佐真也子、宮副英彦

印刷：近代美術印刷(株)

東京本部 〒160 東京都新宿区南元町6-2 TEL.03-3353-9947 FAX.03-3353-9739

バンコク事務所 V.V.U.Apt.23, 135 Soi Phayanak, Phayathai, Bangkok, Thailand TEL.215-0658

プノンペン事務所 No.32 V.430 Sangkat Psa Dantkov Chomkar Mon, Phnom Penh, Cambodia

関西支部 〒573 大阪府枚方市枚方元町4-32 メゾン花303 中野能行方 TEL.0720-43-3380

岡山支部 〒700 岡山市南方1-7-13 ほっと・すべすべ気付 TEL.0862-23-6884 FAX.0862-26-3085